婚約破棄殺人事件 ― 君との婚約を破棄させてもらう！（４）

鷹―

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「君との婚約を破棄させてもらう！」

「私は主人公《ヒロイン》と出会って、初めて本当の愛を知ったんだ！」

「そ、そんな・・・」

翌朝。

「キャー！　ひ、人が死んでる!!!」

主人公《ヒロイン》が無残な死体で発見された。あちこちに多数の傷があり、直接の死因となった大きな傷はないものの、出血多量で死んだのは明らかだった。

容疑者には全員がアリバイがあった。犯人は誰か？

目　次

婚約破棄殺人事件　―　君との婚約を破棄させてもらう！（4）　1

婚約破棄殺人事件　―　君との婚約を破棄させてもらう！（４）

貴族が通う学院。その卒業パーティ。
「君との婚約を破棄させてもらう！」
「君にあれこれ言われるのはうんざりだ。」
「私は主人公《ヒロイン》と出会って、初めて本当の愛を知ったんだ！」
「そ、そんな・・・」
ざわ、ざわ、ざわ・・・
突然、王子が幼いころからの婚約者、公爵令嬢（悪役）との婚約破棄を言い出した。
あきれたものもいたが、とりあえずその場は収まり、卒業パーティは終了した。
多くのものは、卒業後、そのまま領地に戻った。婚約者の公爵令嬢（悪役）も、悲しみのあまり、また家族に相談するために領地に戻った。
何人かは学院の寮に残った。　平民出身で、戻る領地のない主人公《ヒロイン》も寮に残った。

翌朝。
「キャー！　ひ、人が死んでる!!」
女子寮で主人公（ヒロイン）が無残な死体で発見された。あちこちに多数の傷があり、直接の死因となった大きな傷はないものの、出血多量で死んだのは明らかだった。
国王「貴族の御子息を預かる学院で、殺人、しかも息子（王子）の想い人となれば一大事だ。
ワルキューレ卿、調査してくれ。この勅許（許可証）を与える。どんな高位の貴族にでも聞いて、存分に調べてくれ。」
「承りました。全力を尽くします。」

まず、犯行の現場である、女子寮の周辺を調査した。季節柄、あた

りは雪に覆われ、昨晩出入りしたような新しい足跡はない。犯人は女子寮にいた人物の内部犯行ではないか？

「A嬢、あなたは昨晩、どこにいましたか？」
「私は、この部屋にB嬢とずっと一緒にいたわ。学院の思い出を話し込んでいたの。いつの間にか一緒に寝ちゃってたけど。」

「B嬢、あなたは昨晩、どこにいましたか？」
「私は、友達のA嬢の部屋に行って、学院の思い出や、これからの領地の話とかをしていたわ。気が付いたら、A嬢の部屋でそのまま寝ちゃってたわ。恥ずかしい。」
（略）
「K嬢、あなたは昨晩、どこにいましたか？」
「わたしは、ちょっと嫌なことがあって、ずっと自分の部屋に籠（こも）っていたわ。部屋の外には出ていないわ。もし出歩いていたら、隣のJ嬢が気づくはずよ。」

「J嬢、先ほどはどうも。隣のK嬢が部屋から出たか、わかりますか？」
「いいえ、出てないと思うわ。ドアを開けたら音がするはずだもの。何も聞いてないわ。」

女子寮に残っていた容疑者には、全員がアリバイがあった。外部の人間の出入りはない。犯人は誰か？

（シンキングタイム）

「わかりました。全員にアリバイ(不在証明)があるようですね。この中に犯人はいません。
　これは、足跡を残さぬような、隣国の凄腕の殺し屋の仕業でしょう。動機は、将来の王妃を殺して、我が国の混乱を狙ったもの。おそらくそうでしょう。」

「しかし、もう一つの真実があります。それは・・・・」

「A嬢、あなたは主人公《ヒロイン》に婚約者のH騎士を奪われ、婚約破棄され、主人公《ヒロイン》に恨みを持っていますね。」
「・・・・・」
「B嬢、あなたは主人公《ヒロイン》に婚約者のI子爵を奪われ、婚約破棄され、主人公《ヒロイン》に恨みを持っていますね。」
「・・・・・」
(略)
「K嬢、あなたは主人公《ヒロイン》に婚約者の外務卿の息子であるR卿を奪われ、婚約破棄され、主人公《ヒロイン》に恨みを持っていますね。」
「・・・・・」
「ここにいる全員が、主人公《ヒロイン》に恨みがある。あなた方は、全員が共謀してアリバイを作り、全員が主人公《ヒロイン》に恨みを晴らしましたね。
　だから11も傷がある。F嬢、あなたは力がないでしょう。あなたがつけた傷では、相手は死にませんよ。」
「・・・・・」

「結構。何も答えずとも結構。　あの主人公《ヒロイン》の所業を知れば、恨みに思うのも無理からぬこと。
私としても、あのような一売女（ばいた）と、それに騙されるような王子が将来の王と王妃とあっては、この国の将来が不安だ。
国王には、隣国の殺し屋が犯人だと報告します。いいですね？」
「・・・・」

「陛下。犯人がわかりました。隣国の殺し屋が、将来の王妃を殺害して、我が国の混乱を狙ったものと思われます。学園の警備を厳重にすることを進言します。」
「そうか。ご苦労だった。」

公爵令嬢（悪役）「え、私がざまぁするんじゃないの？」